

TheSTYLE / Fashion & Design



審査員特別賞を受賞した参加者と、創設者のバルバラ・フランキンさん(右)。
ほかの参加者にも様々な賞と体験の機会が与えられた



ガブリエル・シュヴァルセンバーグさんによる、
折り紙などに着想した服



パトリック・テイラーさんの服はスキーを
思わせるフォルムのパンツがユニークだ

コンテストが 開く扉

ファッションの中心地から遠く離れた街、イタリアのトリエステで毎年開かれるファッションコンテストが注目されている。2002年に創設された「ITS(イツ)コンテスト」だ。今年は大阪・関西万博のイタリア館で歴代の参加者の作品によるショーも行った。若手デザイナーの登竜門であるにとどまらず、今後のファッションの可能性を感じさせるユニークな存在となっている。

ITSは「ディーゼル」等のブランドを持つ伊OTBなどが支援し、創設者バルバラ・フランキンさんの率いる財団が運営している。応募者は主に、欧米の有名服飾学校などの学生たち。過去の受賞者にはグッチの新アーティスティックディレクター、デムナ・ヴァザリアさんのほか、中里唯馬さんら日本人も多い。25年は900件近い応募から選ばれた10人がファイナリストとして3月に作品を発表した。

作品はどれも個性的だった。例えば折り紙や切り紙に着想して紙で造形した服。建築家の親のもと、スケッチの反故紙で遊んで育ったガブリエル・シュヴァルセンバーグさんが、イッセイミヤケを通じて素材とフォルムの関係に関心をもち、作ったという。

ITSは創設者フランキンさんがかつて自身の卒業式の服を仕立てた時、「布が命を得て服となるさまに感動した」体験から、創作への熱い思いをもって立ち上げた。トリエステはフランキンさんの故郷で、スロベニアとの国境

付近にある辺境の街だ。ファッション関係の産業はなく、見本市が開かれる場所でもないが、だからこそ好都合な面もある。ファッション産業の中心地で行われるコンテストは「その地域の工場で作らねばならない」等の制約が生まれがちなからだ。

しがらみから離れ、自由な発想を第一とするITSの立ち位置は当初から一貫している。一方で、コンテストをめぐる状況はこの十数年で変わった。

数あるコンテストの中でも話題の中心にあるのは、仏LVMHモエヘネシー・ルイヴィトンが13年に立ち上げた「LVMHプライズ」だ。受賞者は最大で40万円(約6500万円)と多額の賞金に加え、法務やマーケティングの指導など実務的な支援を得る。ビジネス上の成功を支援する色合いが強く、応募作も「売れるコレクション」であることが求められる。このほかにも受賞作が大手ファッション通販サイトで販売されるコンテストなど、売れることを重視したものが目立っていた。

この間、ファッション産業自体も巨大化し、ビジネス色が強まった。結果的にブランドごとの違いが見えづらくなり、個性あるクリエイションが改めて求められるようになっていく。創業者の個性が明確な「プラダ」や「ミウミュウ」が好調なものもこうした流れの中で出来事だろう。

ITSのようなコンテストはかつては一般的だったが、今では珍しい存在となり、評価が高まった。また、ITS自身も進化している。

今年のファイナリストには全員1万円の賞金のほか、ファッションの工場・工房などでの10日間のワークショップの機会を与え、クリエイションの充実



メーシー・グリムショーさんはファッション等で有名なソツツアーニ財団による
賞を獲得し、コンテスト後にミラノの同財団施設で作品を発表した

を支援するというスタンスを一層明確にした。人によっては個別のスポンサーから賞金や副賞も上乘せされる。ニットを中心としたコレクションで応募したパトリック・テイラーさんには、ニットメーカーの持つ生地アーカイブを自由に閲覧する権利が与えられた。ITSに応募したのも「賞金のみではなく、職業上の経験が得られるから」だったという。

ファッションが個人による表現であることを今まで以上に重視し、今回は応募者に「個人のストーリーから出発したコレクションとするように」との注文も付けた。アルツハイマー病を発症した祖母をテーマとしたメーシー・グリムショーさんは好例だ。祖母の昔

のファッション等に着想を得ながら、方向感覚の混乱などを服で表現した。ファッションの枠にとどまらなくなってきたのも、近年のITSの特徴だ。

23年にはトリエステに過去の受賞作品や関連資料を保存する美術館、ITSアルカデミーを開いた。著名キュレーターを呼んだ企画展で、アートへの接近を印象つけている。従来ITSのファイナリストはショーで作品を発表してきたが、今回はこの美術館での展示の形をとった。記者発表にはイタリア文化政務次官のルチア・ボルゴンゾーニさんが登場。「服には各々の語りや暮らしがある。つまりは文化なのです」と、今後のイタリア文化を構築するうえでITSへの期待を語った。

コンテスト審査員の顔ぶれも独特だ。メンズファッション見本市で知られるピッティ・イマージネの幹部などファッション業界関係者のほか、美術館キュレーターや、哲学者エマヌエーレ・コッチャさんの顔も。斬新な発想の応募者を見いだしやすい狙いだろう。審査員のバックグラウンドの多様さは、ファッション界以外からの注目にもつながっている。

「ファッション、アート、クリエイションが一体となっているのが今回の受賞作全般の特徴」。こう話すピッティのディレクター、ルカ・リッツィさんは「これはファッションの新たなシステムを予感させる、重要な事実だ」と指摘する。デザイン、アート、建築といった既存のジャンルの境が曖昧になっているのは、家具見本市のミラノサローネ、国際美術展のベネチア・ビエンナーレなど様々なところで見られる傾向だ。こうした中で注目度を増すITSがトリエステという辺境の街で生まれ、地道に育ってきた存在であることも、大変に興味深い。

ジャーナリスト 矢島みゆき
天江尚之撮影